「おかげさまで」を大切に

山形商工会議所議員
小松　久兵衛

昨年、この欄において大久保靖彦さん（山形商工会議所名誉議員）が、「人生において良き友人に恵まれているということは実に幸いである」と書いておりましたが、まことに同感であり、ことに私の場合は友人のみならず、人生の至る所で良き先輩、後輩に支えられ今日に至っています。

家業の印刷は明治10年頃の創業で、その当時は一般相手の刷り物はなく、老舗の広告が主なもので、それで新しい会社を興すのを手伝いながら仕事をつくるといったような具合だったそうです。父久作はフィリピンで昭和19年に戦死したため、創業者の孫である私が継いだわけですが、会社を仕切っていた祖母から「無理だと思っても反発せずにお客さまの言葉に従え」、「いったんこの人が良いと思ったら最後まで付き合え」、「働いている社員が涙１つ流しているなら、５つ流して働け」と教えられたのは祖父の苦労を身近で知っていたからであろうと思います。

山商第９回卒の父の遺言もあって商売を継ぐなら山商、と決めていた。山形４小を卒業し「小荷駄の里の山形商業」に入学したのは昭和21年。食糧難の時代で商業を学ぶのではなく専ら農業を学んだ。校庭に掘られた防空壕を埋めてのジャガイモづくり。夏休みの宿題はわらじ30足作ること。戦時中軍事教練をしていた教師が皆農家の出で、私たちは農事訓練を受けたわけだ。少年飛行兵から復員して同級となった人たちの真似をして煙草を吸ったり、千歳山を登る校内マラソンでは、先輩たちが麓の茶屋で玉コンニャクをほおばったり。戦争が終わった開放感にあふれていました。

山形市立商業高校は初代校長の渡辺徳太郎氏が、1918（大正７）年に「近代経済の知識を普及するには商業教育機関の設置が急務である」と説き、豪商長谷川家の支援を得て創設した。従って市内の商店の子弟が入学した。高陽堂書店の高橋倫之助、ヤマザワ会長の山澤進の両先輩はじめ、亡くなった結城幸三さん、先代の大沼八右衛門さん。同級生には独学で絵を学び県美展の特選に入選した画家の駒谷繁勝君をはじめ多士済々。旧制中学から新制高校と６年間、同じ学び舎で約400名の同級生と苦楽を共にしました。諸兄より陰に陽に大変お世話になり、ただただ感謝する次第。同窓会幹事長、ＰＴＡ会長をお引き受けしたのも少しばかりの恩返しです。

山商卒業後、祖母が女手ひとつで苦しい時代を守り抜ぬいた家業を任されたが、とにかく社長業よりもまず仕事を覚えるのが精一杯でした。先輩たちを見習って必死になって働きました。昭和30年代中ごろに入ると、池田内閣の所得倍増政策から40年代の田中内閣の列島改造論と高度成長時代が続き恵まれた時代でした。最近は同級生の弔辞を読むことが多くなりました。上山で開かれた山商同窓会で、同級生から「小松久昭」と本名で呼ばれた。60数年前当時のことが思い出され涙が出るほど感激した。

うれしいことに孫が後を継いでくれることになりましたが、今は大変な時代。「このごろ注文が来なくなった」と思っている、とお得意さんが廃業していたり…。孫にとって厳しい船出です。温故知新。人生山あり谷あり。商売も良い時もあれば苦しい時もある。教訓めいたことを口にする柄でもないが、祖母の戒めとともに、先輩、友人を大切にせよ、と孫には教えたいものです。

㈱小松印刷所代表取締役社長